



## 赤い靴はいてた女の子

100年前の4月20日は、夏目漱石が朝日新聞に「こころ」の連載を開始した日である。そのことを記念して、朝日新聞では月曜日から金曜日までのオピニオン欄に、再び「こころ」の連載が始まっている。わかりにくい語句には大野淳一・武蔵大学教授が注釈もつけてくれるし、漱石マメ知識みたいな記事も載っていたりしてなかなか楽しい。

現在、漱石は世界でも広く読まれているが、その理由の一つが、村上春樹が「好きな作家」として漱石を採り上げていることだという。たまたま今頭休めに読んでいた村上春樹の『村上ラヂオ』（新潮文庫）の中に、先日の横浜遠足とも関連するおもしろい話が載っていたので紹介しよう。

\*

古い歌の歌詞って、古いだけあって、何をいっているのかよくわからんものがあります。たとえば童謡の『赤い靴』に

「赤い靴はいてた女の子、いーじんさんにつれられて行っちゃった」

という一節がある。もちろん「いーじんさん」は「異人さん」で、“a stranger”要するに外国人のことなんだけど、この意味がわかっていない人はけっこう多い。「異人」という言葉が既に死語である上に、音をひっばっているから、「なんのこっちゃ」になってしまっていて、まあしょうがないといえばしょうがないんだけど、この前インターネットで「いーじんさん」の解釈を募集したら、ずいぶん多くの「誤解」が集まった。

数からいうと、「いいじいさんにつれられて」「ひいじいさんにつれられて」というが圧倒的に多かった。しかしひいじいさんとも

なるとけっこうな齢だろうし、女の子の手を引いて港を歩くのも大変だったのではと、他人ごとにならついで心配になってしまう。「いいじいさん」だと、これはハッピーエンドっぽくていいんだけど、でも人間一皮むいてみないとわからないから、一夜明けたらいいじいさんが悪いじいさんに豹変して、「ひひひ、お嬢ちゃんや」なんてダークな展開になるかも知れない。（中略）

それから「にんじんさん」というわけのわからない解釈もあった。横浜でにんじんに連れて行かれたらいったいどうなるんだ？僕は個人的には「イージーさんにつれられて行っちゃった」というのが、「楽しけりゃそれでいーじゃん」的で、刹那的で、けっこう好きなんだけど、しかしそこまでいくと童謡には向かないだろう。（pp38-41）



（山下公園にて撮影）